

水の郷めぐり 第6回 愛知用水

水資源機構が管理するダム、水路、堰など様々な「水の郷」を巡る企画。水とともに生きる魅力あふれる町を訪れ、そこで働く人々をご紹介します。第6回は、愛知県のライフラインである**愛知用水**をご紹介します。

愛知用水の受益地域で生産される主な特産物

愛知用水の通水により、安定した農業用水が確保され、知多半島や尾張地域では施設園芸や畑作が発展しました。温暖な気候と都市近郊という立地条件を生かし、収益性の高い多様な農産物が生産されています。



しらめい

ブロッコリー

キャベツ

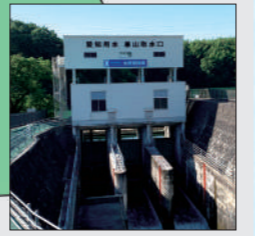
木の山芋

いちぢく

にんじん

愛知用水事業の効果

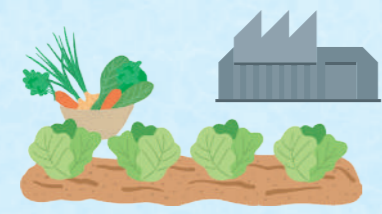
愛知用水事業の効果として、農業用水の安定的な供給が可能となったことにより、知多半島や尾張地域をはじめとする受益地では、野菜・果実など多様な農産物の生産が拡大し、施設園芸や高収益作物への転換が進みました。温暖な気候や都市近郊という地の利を生かしたブランド農産物の定着が、産地の収益力向上につながっています。また、水道用水としても重要な役割を担っており、愛知県内の広範な地域に生活用水を供給しています。これにより、人口集積地域の暮らしや産業活動を支える基盤として、大きな効果を発揮しています。



愛知用水兼山取取水口



愛知用水HP



木曾川・長良川の恵みを知多半島へ

昭和36年、世紀の大事業といわれた愛知用水が完成し、木曾川の水が愛知県へ届けられるようになりました。

それまで慢性的な水不足に悩まされていた地域に安定した水が供給され、農業や産業、都市の発展が大きく進みました。

その後、人口の増加や産業の発展により、水の使用量はさらに増えていきました。将来にわたり安定して水を届けるため、新たな水源として計画されたのが長良川河口堰です。



長良川河口堰

暮らしを支える「長良導水事業」

長良導水事業は、長良川河口堰によって利用可能となった水のうち、最大で毎秒2.86立方メートルを取水し、知多半島へ送る事業です。

水は、河口堰の約1.7km上流の長良川左岸から取り入れられ、約34kmの導水路を通して愛知県の知多浄水場へ送られます。ここで安全できれいな水道水へと浄水され、各家庭や事業所へ届けられています。



長良導水取水口



国と県が連携して整備

平成5年、「木曾川水系水資源開発基本計画」に長良導水事業が追加され、国の重要な水資源開発事業として位置づけられました。三重県内の上流部約5kmの施設は、水資源機構が平成4年度から平成9年度にかけて建設。総事業費は約210億円にのぼります。

一方、愛知県内の中・下流部の施設は、愛知県が水道用水供給事業として整備しました。下流部の一部は、昭和55年から木曾川の水を暫定的に活用してきた既存施設を有効活用しています。平成9年度に完成し、平成10年度から本格的な管理・運用が始まりました。

9つの市町へ、安定した水を

知多浄水場からは、半田市、常滑市、東海市、知多市、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町の4市5町へ水が供給されています。

毎日の暮らしに欠かせない水。その安定供給の背景には、川の水を確実に届けるための長年の計画と整備があります。

長良導水事業は、木曾川・長良川の恵みを未来へつなぎ、地域の安心と発展を支えています。



山口農園 三代目 山口茂樹さん



大府市で代々農業を営む山口茂樹さん(73)。自宅前には直売所「脇道の駅」を構え、自ら育てた野菜や果物を販売しています。

山口さんが小学2年生、8歳のときに愛知用水が通水しました。それ以前は、地域の農家はため池に雨水をためて営農していたといいます。「水の心配をせずに農業ができるようになったことは、本当にありがたいこと」と振り返ります。

現在はイチジクを中心に、トマト、キャベツ、白菜、ニンジン、玉ねぎ、木の山芋など多品目を栽培。季節ごとに作物を変える「マルチ栽培」に取り組み、完熟したものは直売所で販売し、規格外品や出荷用はJAへ納めています。地域のイベント「元気の郷」でも販売するなど、地元へ根ざした経営を続けています。

「夏のイチジクは特に水が命。毎日たくさん使います」。安定した水

の供給は欠かせません。平成6年の大湯水では水不足を経験しましたが、それ以外は安定して水が届いているといいます。

一方で、農業の将来については危機感も抱きます。「若い担い手を育てることが大切。農業は楽ではないが、覚悟を持って向き合えばやりがいがある」。

愛知用水に対しては、「これだけ大規模に水を送っているのだから、新しい活用方法も



考えられるのでは。例えば水力発電など、エネルギーとしての利用も面白い」と期待を寄せます。

「今やれることをやるだけ」。水とともに歩んできた73年。その背中が、地域農業のこれからを静かに示しています。



愛知県 愛知用水水道事務所 上野浄水場 場長 長堀 俊一さん



愛知用水の水を、安全な水道水・工業用水へとつくりかえる上野浄水場。昭和36年工業用水、昭和37年水道の給水開始以来、県内でも最も長く稼働している浄水場です。

「浄水場は24時間365日、止めることができません」

長堀場長は、浄水場業務の統括に加え、重大な設備を扱う責任者として電気主任技術者も兼務しています。運転管理は民間事業者へ委託し、県職員が監督する体制で、安全で安定した水づくりを支えています。

現在特に力を入れているのが、老朽化設備の更新です。昭和30年代に整備された施設も多く、各設備は順次更新しているものの、継続的な対策が欠かせません。水の安定供給を維持するため、現場の状況を本庁へ伝え更新計画を調整しています。

設備は電気と機械が複雑に連携して動くため、的確な判断には経験が必要です。「トラブル時にも落ち着いて対応できる力を維持できるように、知識と経験の継承に取り組んでいきたい」と話しています。

また、浄水場の運用には愛知池や愛知用水幹線水路の情報が欠かせません。水質や流量の変化に備え、愛知用水総合管理所と密に連携しながら安定取水を図っています。

水道は東海市、大府市、刈谷市、高浜市、豊明市に、工水は大府市や名古屋南部臨海工業地帯に、それぞれ給水しています。歴史ある地域の暮らしと産業を、水で支え続けること。それが浄水場の使命です。

蛇口をひねれば当たり前に出る水。その裏側で、地域の水を支えるため、浄水場は日々休むことなく運転を続けています。



愛知用水土地改良区 半田事務所 技師 西山 技さん



愛知用水土地改良区半田事務所、農家一人ひとりの田んぼへ水を届ける最前線に立つ西山さん。着任3年目の現在は施設工事を担当していますが、1、2年目は主に配水業務に携わってきました。

土地改良区の大変な役割は、農業用水の配水管理です。特に通水時期の夏場は水の需要が集中し、高台の田んぼでは水が届きにくくなることもあります。「実際に現場へ行き、バルブを操作して水の配分を調整します。必要に応じて時間割を組み、順番に使っていただくこともあります」。農家さんと直接のコミュニケーションを大切にし、田んぼを枯らさないことを最優先に、迅速な対応を心がけているといいます。

半田管内では、通水開始から約60年が経過した施設も多く、老朽化対策も大きな課題です。揚水機の管理やパイプラインの補修、空気弁の点検・修繕など、日々の維持管理は欠かせません。「工事が完了し

て、しっかり次の通水につなげられた時は大きな達成感がある」と話します。

配水業務では、農家さんから直接相談を受けることも少なくありません。通水時期の調整など一つ一つの声を耳を傾け、現場で丁寧に説明することを大切にしています。「ありがとうございますよ」「来年もよろしくね」と声をかけてもらえると、本当にうれしいですね」。その言葉が、日々の原動力です。



この仕事に就いてから、雨の見方も変わりました。「今は雨が降るとありがたい。ダムの貯水量や天気予報が自然と気になります」。安定した水を届けるため、今日も現場で水と向き合っています。



職員 Interview

愛知用水総合管理所 下流管理所 主査 東谷拓哉さん



愛知用水総合管理所の出先である下流管理所は、愛知用水施設の中でも特に下流に位置する施設を一括で管理しており、全長約112kmある幹線水路の内、大府市(吉川チェック)~南知多町(美浜揚水機場)間の約37kmの区間を担当している管理所です。下流で取水された水は、その殆どを農業用水として知多半島の各農業従事者の元へと日々お届けしています。



その下流管理所にて土木職として機構施設の点検・修繕等の維持管理業務に従事している職員の一人、東谷さん。昨年10月に着任したばかりであり、常日頃より現場に出ては機場対応や修繕箇所の工事発注等、日々忙しく業務に励んでおります。

日々業務に従事する中で大切にしている事として、「地元の方々とのコミュニケーションを常に意識している」事だと東谷さんは言います。例えば水路施設の巡視点検を行っている途中、地元の方とお会いしたときは挨拶をしたりお話を

したりすることが良くあります。その中で地元の方に「いつもお疲れ様です。」や「愛知用水があって良かったねえ」といった言葉をかけてくださったりしたときはうれしい気持ちになり、業務を行う上でのモチベーションとなっています。



下流管理所操作室から望む前山池

また愛知用水では通水開始から約60年が経過した施設も多く、老朽化対策が喫緊の課題となっており、直接現場に赴き施設の状況をくまなくチェックする事により、通水に支障が出ないように維持管理を徹底しています。下流管理所だけでも揚水機場が18基・ポンプが20本あり、全部を点検し修繕するのは大変な作業ではありますが、同時にそのおかげで日々の通水に支障が出ないようにしているという自負があります。

「愛知用水には普段から滞りなく水が流れており、それが当たり前のもとなっておりますが、その当たり前を支えている「縁の下の力持ち」として仕事をしている事にやりがいを感じています」と、東谷さん。同時に「そしてこれからも愛知用水の水が受益者の皆様に常にお届けできるよう、いつも心に留めながら愛知用水の運用に携わっていきたくと思っています。」と、これからの展望について語りました。

所長インタビュー

当初の愛知用水事業は、戦後間もない頃、久野庄太郎さん(篤農家)と濱島辰雄先生(高校教師)の出会いと運動から始まり、吉田茂首相(当時)への説明、世界銀行からの借款、愛知用水公団の設立を経て、昭和36年9月には建設工事完了と今では考えられないスピードで実施されました。

通水開始以来、64年に渡り本地域を潤し続けその発展に寄与してきましたが、その過程では、水路施設の経年劣化や水需要の変化などに対応するため愛知用水二期事業が実施され、幹線水路(共用区間)の二連化、総管での集中監視制御方式の導入など、水路システムとしては完成形に近い施設となり、また、長野県西部地震の影響による堆積土砂へ対応するため牧尾ダム堆砂対策も実施され、用水の安定供給確保に努めて参りました。最近では、南海トラフ地震に備える耐震対策

や二期事業後の経年変化による老朽化への対策などの課題に対して、調査検討を進めています。

愛知総管は、幹線水路(112km)の中間地点に位置する愛知池のそばにありますが、愛知池は調整池として機能を果たすと同時に、レガッタ大会での湖面利用、周回道路でのマラソン大会等のイベント、ジョギング、ウォーキング等で多くの方々に親しまれています。非常に長い歴史を経て、愛知用水施設は地域の一部になっていると肌で実感します。

今後とも総管体制のもと職員一丸となって、先人達の偉業とその長い歴史を忘れることなく、地域の期待に応えられるよう愛知用水の適切な運用と保全に努めて参ります。

愛知用水総合管理所 所長 小栗 幸樹